こんなんしてます。

わだいのしごと

128

宿命のむら

山間の大都会

山間地に行くと、わずかな家は閑散とし、通る人もいない寂しい地域に出合います。しかし、そのような地域にもかつては映画館やパチンコ屋があり、多くの労働者が滞在し、娯楽のために散財をするほどのにぎわいがあった、と聞くことがよくあります。鉱山の町や材木を筏流するための中継地であったような所で、産業が人間の労働力に頼っていた時代のことです。

古座川中流域の真砂（まなご）地区もそのような繁華街でした。古座川町は古くから製炭業が盛んで、江戸や大阪の炭需要の大半を担っていたともいわれる大産地。古座川上流部の炭は真砂に集められ、真砂からは炭が真砂船と呼ばれる川舟で河口の古座まで運ばれました。帰りには川舟に米や日用品などを積み戻るということで、真砂は山と町をつなぐ物流の発着地点でした。川と山肌に挟まれたこの地区には大勢の労働者があふれ、銀行の本店や支店、旅館、映画館、赤線まであったといいます。

しかし、昭和期に入り道路の開通と共に川舟輸送は消滅。戦後は薪炭の使用も激減し、木材も長い不況に入り、他の地域同様に真砂でも過疎化が進行。昭和30年ごろには60戸だった世帯数も現在は3戸となりました。

農の開放

耕地もなく狭隘（きょうあい）な土地の真砂は、三次産業の「街」でした。三次産業とは、金融、物流、商業、サービス業などのことで、これらが成立するのは、農林漁業など一次産業と加工、製造業などの二次産業が生み出す経済が地域で回るからこそ。一次、二次産業が衰退すると三次産業は成立しません。林業や製炭業の衰退とともに真砂は一つの役割を終えたのです。宿命のむらだったともいえます。

かつての船着き場（古座川町真砂）

最近、農山村や島に移住する若者や若い夫婦が目立つようになってきました。IT技術やデザイン力に優れた彼らは、田舎の風景の中で意欲的に暮らしを創り出しています。しかし、美しい景観など表の地域資源だけを活用して生業とすると、ITデザイナーやカフェ営業、手作りパン屋などサービス業に片寄る傾向があります。泥くさい暮らしの現実はどこにいったのでしょう。地域はカフェの舞台装置だけになってしまったのでしょうか？

一方で、農業を志願する若者も少しずつ出て来ており、新しい農法や販売方法にチャレンジしています。しかし、農地の流動化はなかなか進みません。耕作放棄をしても先祖伝来の農地を持ち続ける慣習の壁もあり、また、陽当たりよく利便性のある優良農地は商業施設や発電設備にも「優良」なため、米よりも何十倍何百倍も儲かるという目論見で、いとも簡単に青々と美しい農の姿を捨て転用されていきます。意欲ある若い世代に一等の農地を任せる方法はないものでしょうか。

最近、日本の最西端の島に行ってきました。紀州熊野の習俗との関連性を調べるためです。島の西部の半島部には日本耕地形の原初形と言われる円形の広い円畑（まるはた）がおびただしくありました。渦巻き状に牛が土を鋤（す）くのに効率的である、丸と丸のすき間を防風林に活用するなどの説がありますが、それが風土にとって最適な土地利用だったのでしょう。

周囲が円形の円畑（五島市三井楽）

上空から見た風景は先人の知恵とエネルギーが迫り壮観です。この円畑を若者に開放！とすれば、若者が湧くように島に集結するのでは、と夢想しました。熊野でも今なお美しく耕された棚田を見ることがあります。

一次産業の復権こそが命と暮らしの本質です。丹精込めて田の基礎を作り上げた美田こそ、若者にバトンタッチしたい。農の衰退を宿命としないためにも。

プロフィル

湯崎真梨子（ゆざき　まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター　教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。